

悪党研究会編

『中世荘園の基層』

岩田書院 二〇一三・一二刊

A5 二五〇頁 二八〇〇円

本書は、二〇一二年五月十三日に東京を拠点とする悪党研究会の主催で開催されたシンポジウム「中世荘園の基層」（於早稲田大学）の内容に個別論文を加えて上梓されたものである。第1部「シンポジウム「中世荘園の基層」」は当日のシンポジウム報告をもとにした①田村憲美「中世における生業環境と民衆の地域社会」、②高木徳郎「中世における山野の領有と絵図」、③三藤秀久「鎌倉末期における荘官の悪党化」、④楠木武「鎌倉後期の「海賊」と公文・沙汰人層」及び当日の「シンポジウム討論」を収め、第2部は「特論」として七本の個別論文を収めている。

ここでは第1部の論点を中心に紹介したい。近年各方面から荘園制研究が進んだが、シンポジウムでは荘園制という「外皮」のなかで生きていた人々の生活空間の実態（「荘園制の「中身」」）を問うことがテーマとなった。各論ではおおそ中世前・後期の移行期を中心に問題設定がなされており、中世史全体において地域社会論の深化が望まれる今日の研究状況にあつては、テーマ設定自体に惹かれる。

個別論点をみると、①・②では気候条件や自然環境のもとの村落の動向をテーマにしており、検討素材として挙げられた史料

の多様性も注目される。①では、従来或いは荘園領主との政治的な交渉の成果（農民闘争）とされ、或いは現実の自然災害を反映したものと評価が分かれてきた播摩国矢野荘における「河成」認定について、中世の気象データの成果を中心に扱いながら、再検討を試み、従来の評価を乗り越えようとしている。一方②では、複数の荘園絵図が存在する西大寺・秋篠寺堺相論図から、この地域における用益を廻る社会関係の矛盾を読み解いている。

③は、鎌倉後期に山城国上桂荘の領有体系が分裂し、政治的に排除されるべき「悪党」が生み出される過程を論じ、④は鎌倉末期の摂津国長洲荘を中心に、港湾の支配体系の改変と共に政治的に生み出される「海賊」について論じている。③・④ともに、地域の政治動向に伴って生み出される「悪党」「海賊」の具体像を論じた点は興味深い。なお、第2部「特論」の櫻井彦「悪党教念と「八坂目銭」」は、④と密接に関わり、相互補強する論考となっている。

以上、シンポジウム論文の要点を中心に紹介したが、その他第2部「特論」でも列島中世の地域社会に焦点を当てた様々な問題が取り上げられている。本書は題材となる史料の多様性をもふくめ地域社会論の新水準を示した成果と言えよう。近年では関連諸学のデータや、精度の高い景観復元・現地調査などの成果が蓄積され、これらを用いた地域社会論が可能となりつつある。と同時に、関連諸学の分析結果を歴史学がどのように検証するのか、その方法も今後は議論になるだろう。一方、荘園絵図研究は、全般として未だ個別荘園を理解する補助的な史料に留まっている観が

あり、未だ地域社会論を深める研究材料にはなり得ていないように思う。荘園絵図の史料学とともに、今後もこうした視点から荘園絵図研究を深化させる必要がある。

最後になるが、悪党研究会が論文集を刊行するのはこれで三冊目である。「あとがき」によると、研究会は一九八八年の発足である。長期にわたる活動に驚く。地域社会論は、列島社会の歴史過程を考える上で不可欠な論点であるが、こうした論点への熱い眼差しを持ち続ける研究者達が問題意識を共有し、議論し続けることによって継続され、発展してきたことが窺える。今後の展開を楽しみにしたい。

(守田逸人)